

延辺朝鮮族自治州を訪れて（2018年9月8日～14日）

早稲田奉仕園寮生・早稲田大学アジア太平洋研究科修士2年

私にとって「朝鮮族」とはとても聞き慣れている言葉である。朝鮮半島の出身であるから当たり前だと考えるかも知れないが、韓国では自らを朝鮮族とは言わない。「我が民族」と呼び、あえて他民族と区別するときは「韓民族」との呼び方を使う。なら朝鮮族は誰を指す言葉であろうか、韓国の「標準国語辞典」は次のように説明している。1.中国に住む同胞、2.韓族の北朝鮮語。韓国国内であえて北朝鮮語を使用するわけないので、韓国で朝鮮族といえば中国に住む同胞を指す言葉となる。近年仕事を求め、韓国に定着するか出稼ぎに来る朝鮮族が増えた。もはやその存在について知らない韓国人はいないと言っても過言ではないだろう。しかし生憎だというべく悪い噂だけが先に広まり、同じ民族と言う割には韓国国内において彼らに対する印象はよくない。むしろひどく悪いとまで言えよう。一例として、韓国の友だちに延吉に行く話をしたら、「臓器を奪われないように気をつけろう」とちょっと面白くない話を冗談のように言ってくる。朝鮮族の人が韓国国内で臓器の密売をして捕まったとのニュースを聞いたのだろう。韓国にもそれに匹敵するようなひどい事件はいくつもあった。その事件が韓国人全ての姿を反映することでないように、一部の朝鮮族の行為もまた彼ら全員を代弁するわけではない。そういう当たり前がなぜか朝鮮族に対しては通じないのが現在の韓国である。大多数の朝鮮族は決して周りの地域コミュニティーに被害を及ぼしていない。確言できる理由は、私の実家が朝鮮族の集団居住街の大林という街の隣にいるからである。

その大林の朝鮮族市場に何回も訪れたことがある。普通の韓国の市場では見ない風景が広がる。まず訛りのある口調、韓国で見ない食べ物、売っている物からうっすら見えてくるのは、確かに「我々」と「彼ら」の違いである。そういったところが僕にとっては面白味である。しかし知らない対象について怯え警戒する人がいる。経済力の差から来る差別感情もある。彼らが安い労働力を提供しているせいで、韓国の同種の職に就く人々の肩身が狭くなっていると苦情もある。もちろん筋違いの八つ当たりではあると思う。在日朝鮮人・韓国人に非寛容的な日本社会をよく批判する私としては、自分が属する社会にも存在するそういった排他性を恥ずかしく思う。

今回のプログラム参加を決めたのは、正直にいうと早稲田奉仕園の支援により参加費が普通日本から延吉までの往復飛行機チケットよりも安かったからである。しかし一方では韓国での自分の暮らしと無縁ではなかった朝鮮族についてもっと知りたいという思いがあったからでもある。今回の訪問で色々な発見があった。その中で一番当たり前ではあるが話さずに過ごせないことは、やはり人が住んでいるところはそこがどこであろうが似ているというごく単純なことである。

プログラムは延吉のあっちこっちを踏査するより、現地の延辺大学の学生たちとの交流に重点をおい

ていた。そのため、多くの学生たちと話を交わし、彼らの経験を間接体験することができた。そのほとんどの学生たちは日本語学科に所属する朝鮮族だった。そのため、コミュニケーションは唯一の日本人である後藤りさこさんと一緒の場合は日本語で行ったが、個人的な話は韓国語と朝鮮語を使った。延辺大学の配慮で数多くの学生たちとふれあうことができた。その話を全て書いていくことはできないため、記憶に残る学生二人について話すことにする。まず吉祥君である。彼は朝鮮族で、まだ19歳なのに大学3年生だという。飛び級で大学に他の人より早く入った秀才である。

彼とは政治に関して長い間、密度のある話を交わした。ほとんどの政治の話がそうであるように私たちの話にも時にぶつかり、会話にはほどよい緊張感が漂った。政治の話に至ったきっかけはスケジュールに含まれていた授業参観のとき、私たちは5分間スピーチをするように頼まれたことだった。私は一年前にあった韓国のろうそくデモの話と絡んで、愛国とはなにかについて話した。愛国とは、課税や義務を果たすことではなく、国に忠誠することでもなく、自分が国家の主人であると感じる時始めて得られたものだという趣旨のスピーチをした。吉祥君はたまたまその授業をとっていた。授業が終わったあと、彼はもっとスピーチのテーマについて話したいと連絡先の交換を申出てくれた。

私たちは以後帽兒山の登山のスケジュールで再び会って、あるきながら体制と覇権について話をした。私が個人の自由を制限する中国の制度について批判すると、彼は個人の犠牲は国の発展のために一定程度やむを得ないことと返してきた。国家の横暴を止められない一党制の構造について批判したら、彼は中国が一党制である故に得た早い成長、安定性などのメリットについて述べた。彼は中国の政府に対し、一部の不正と矛盾を認めつつも人民のために尽くすと信じていた。彼が国に対する信頼を持っていた理由は、いままでの国の成長が民の生活の質を向上させてきたと思っているからだった。

彼の話は実は韓国のケースと非常に似ているように聞こえた。韓国の80年代の急激な経済成長の後ろに構えていたのも開発独裁だった。政治的な安定性を基盤に韓国の経済は着々と成長した。その時代の産業の担い手だった韓国のベビーブーム世代は、今でも彼らの血と汗で経済をここまで成長させたことを自慢に思っている。急激な成長には安い賃金と過剰な労働を強いられた労働者と、それを容認する国があった。揺るがない政治は腐敗し、社会には不満が蔓延した。不満を抱いた人々が街に出て声を上げるようになった。韓国の80年代民主化運動が起きた過程である。

吉祥君にそのような話をした。もちろん中国が韓国と同じ道を歩むとは限らないことも添えた。しかしいざとなった時、政府に全てを任せっぱなしにする体制について懸念することも必要ではないかと話した。すると彼は天安門事件や香港で起きた五星紅旗を燃やしたなどの大事件が中国国内で全く知られてないことを言ってくれた。彼はこれから日本で1年間留学するつもりだという。これからの留学を中国から離れて、冷静に中国について見据える時間にしたいと言ってくれた。

もう一人の記憶に残る学生は、雅琳さんという日本語学科の4年生の女の子だった。年齢は24歳、青森県で1年間留学を経験した。彼女はサポート役としてずっと私たちの旅に同行してくれた。日本語が堪能で、外向的な性格で、色々なことに興味をもっている彼女は、韓国のアイドルが好きで、フランス人の友だちがいるためフランス語も勉強し、ファッションにも興味がある。日本や韓国によくいる国籍や民族などの枠にとらわれない今どきの女の子のように見えた。彼女は朝鮮族訛りでもなく韓

国訛りとも言えない言葉遣いをしていた。多分彼女を韓国で出会っていたら、韓国人と思っていたはずで、日本で出会っていたら国籍が分からなかったと思う。聞いてみたら親が韓国で生活しているため、韓国と延吉を行き来しているという。

彼女を見ながら、朝鮮族と韓民族を含む民族という概念が今のような地位を失わず続いていくだろうかという考えが浮かんだ。民族とは簡単に定義することのできない概念だが、言語、風習、宗教、政治、文化、歴史等を共有する集団であり、それによって「我々是一緒」という同質感を持つ集団である。民族とは韓国や日本で一部誤解が広まっているような血統的に近い集団を指す言葉ではない。むしろ近代において形成された民族自決による国民国家では、政府主導の教育によってその民族性を再生産されていく。最近国際化が進展することによる民族の有名無実化から見られるように、そしてまたその国際化のバックラッシュによる民族主義から見られるように流動性を持ち変わりうる概念である。彼女を含め、延辺大学で会った数多くの学生の家族が韓国に出稼ぎに行っているようだった。延辺朝鮮族自治州の朝鮮族は州全体人口の約30%である。今は韓国や中国の大都会に流出される人口が増えているため、今後自治州としての地位を失ってしまうのではないかと懸念する人もいた。

見方によっては中国の同化戦略による朝鮮族の漢族化と一部朝鮮族が韓国社会に編入されていっていると読み取ることもできよう。しかしこれを民族性を失う、他民族になると見るより国際化が進んでいる影響だと見るべきだと思う。国際化によって人と人の距離が過去と比べ物にならないほど近くなっている。大学の手前にある雑居ビル「大学城」には、韓国のチェーン店を含め、台湾のバブルティーの店、海外の有名ファストフード店がずらりと並んでいる。延吉にはそれほど多様な文化が浸透していて、中国料理屋と延辺式冷麺屋で代表される延辺固有の文化と中国の文化とまでが入り交ざっている。過去一つの民族を一丸としてまとめてくれたその民族の固有性というものが、色々な文化が交差することによって薄くなっているのではないか。これは単に朝鮮族だけに見られる現象ではないであろう。最近祭祀を行う家庭が減っている韓国のように過去のかしこまった行事に粗忽になりがちなのは世界共通であろう。地域民の大都会への流入し、地域が空洞化していくのもどこにでも見える現象である。

こういった世界化の波が寄せている中でも吉祥君や雅琳さんの話で読み取れたのは、自分が中国人だという確たるアイデンティティである。最初は少し驚きだったのだ。詳しくはないが、今回の旅で延辺大学の学生たちに聞いたところ、中国社会で少数民族は共産党で高い地位まで上がることができず、軍人として出世することも難しいと言った。見方によっては差別に受け取れることを彼は、中国という大きい国家が国の秩序を維持するためにとっての方便として理解していることだった。むしろ中国が延吉を朝鮮族自治州として認定し、色々な恩恵を与えてくれていることを高く評価する。延辺大学の授業で学んだ朝鮮族の歴史を考えれば、朝鮮族の権利を一部認めてくれた中国政府の政策が朝鮮族社会の同意と支持を送っているように見えた。

プログラムの中には朝鮮族の歴史を学ぶ授業があった。朝鮮族は帝国主義日本が朝鮮において植民地支配をはじめた際、行った土地調査事業によって小作する地を奪われた農民たちが先に定着し、後で日本の旧満州への移住政策によって連れて行かれた人たちが開墾した土地だという。日本帝国が戦争に負けて朝鮮半島から去ってからも、彼らが延辺に居残った理由は複数ある。まず農民たちに土地は

生きていくために必要な第一の手段であることが挙げられる。朝鮮半島に帰る旅費がなく帰れなかった人もいた。また後からお金を貯めて帰ろうとしても、朝鮮半島の土地分配は既に終わった時点で、行っても土地を別けてもらえないという事情があった。そして、もともと延辺から近い朝鮮半島北部から北へ渡った人々は朝鮮王朝の時代から色々な差別を受けてきたということも彼らが延辺に住み着くようになった理由であるという。朝鮮半島の北部は昔から権力闘争で敗北した人々の配流地であり、中国との国境を面しているため軍事的な緩衝地帯として移住政策によって連れて来られた人たちもいた。地域差別が存在し、中央進出の機会も制限された。朝鮮末期には中央政府の力が弱まった時、大きな反乱があったことさえある。こういった人々に苦勞して開拓した土地を認めてくれた中国政府が信頼と支持を受けているということは十分に納得の行く話だった。多分吉祥君や雅琳さん持つ中国人というアイデンティティーは、このような共通の歴史を材料にして成り立っているものだと思う。もちろんそれに加えて最近経済的にも国際社会においても影響力が大きくなった中国に対する誇りのようなものもあると思う。

今回の旅で数多くの友だちができた。6泊7日の短い時間ではあったが、民族と国家について考えさせられた濃い時間だった。改めてこういう企画を設けてくださった早稲田奉仕園に感謝し、延辺大学の関係者の方々へもお礼を申し上げたい。そして特に一緒に旅した3人には、色々とお世話になった。お湯が出なく慌てたり、空港で小さいハプニングあったりもしたが振り返ってみれば楽しい思い出である。一つ悔いとして残るのは、中国語を少しでも学んでいたらもっと色々な経験ができたのではないかということである。大変勉強になった今回のプログラムに一つ足りてなかったのは、日本人学生の参加者の人数である。韓国をルーツに持つ参加者が多かったため、話のテーマが韓国と朝鮮族の関係になりがちな部分があったと思う。日本人の学生の参加者が増えたら、共に戦争の歴史やアジアにおける今後の課題について色々話し合えるチャンスも増えたのではないか思った。この報告書は次回参加する可能性のある人を想定して書いたものではないため、本文の中で話していないが、延辺の食べ物は安くて美味しい。もし少しでも興味が湧いたのなら、ぜひおすすめしたいプログラムである。意外と根深い、遠くに離れて暮らす中国の少数民族と自分たちの関わりと、彼らの優しさと国に関係せず存在する共通点に驚かされる経験になると思う。